

大学生の英語学習意欲 ——テストとアンケートの結果から——

Motivations of University Students to Learn English: Through the Results of Tests and Questionnaire

風間 友理

Yuri Kazama

はじめに

私は長年、大学で非常勤講師として英語の授業を担当してきた。今の大学生は、小学校のときから教科として英語を教えられている世代であり、英語に慣れ親しんできているはずである。しかし以前の学生たちと比べて英語力の低下ということを感じてしまう。中学校で学習する範囲の英語が定着していないと思われる学生に出会うことは珍しくない。そのような中、少しでも学生が基本的な知識を身に付け、また、英語に対する興味を持ってもらえるように日々の授業を行っている。

ところで、私が担当している学生は、文学部、経済学部など文系の学生、工学部や医療系学部など理系の学生、教育・保育系の学生など多岐にわたっている。授業中、および休みの時間の会話などを通して彼らと接していると、所属学部に応じて、英語への取り組み方も様々であるように見受けられる。そのような学生に効果的に指導するためには学生たちの英語学習意欲について知っておくことが大切だと考えた。

そこで、学生の英語力と授業後の英語力の伸長の程度、英語を学習することをどのように捉えているか、など、学習意欲に関係すると考えられるファクターに着目し、文系の学生と理系の学生の両方について調べて考察することにした。

調査の詳細

調査の対象

私が授業を担当するクラスの中から4クラス分の学生を対象として、次の2つのグループにおいて調査・考察する。

A 文文学部2クラス（同一大学）の学生、合計63名

B 理系学部2クラス（同一大学）の学生、合計60名^{注1)}

AとBは別の大学である。どちらも、使用教科書や内容、進度は大学から指定されている。文法、読解、リスニングなどの要素を含む総合英語の位置づけのクラスである^{注2)}。対象はすべて1年生である。また、どちらの大学も、大手進学塾の偏差値を基準にすると、いわゆる中堅以下とされる大学である。

調査の方法

意欲的に授業に臨んでいるかどうかを調べるひとつの目安として、両方のグループに同一のテストを、13週の間隔をあけて2回行い、1回目と2回目の差やグループによる違いを調べる。

1回目のテストは2024年4月、前期の授業が始まった直後に行った。その際、学生には、後に同じテストをもう一回行うということは知らせていない。その後、2回目のテストまでは大学が指定する内容で授業を行い、その間にテスト内容を意識した特別な指導は何も行わなかった。2回目のテストは2024年7月の、前期最後の授業において行った。

学生には、このテストは授業運営上の参考にするためのものであるとして、テストの出来具合は成績に関係ないことを告げている。

テストは2種類ある。どちらも大学教科書を参考に作成したもので、問題をそのままここに掲載することは控える。一つは、和訳・選択肢付きで空所を埋める語彙・文法の問題、和訳付きの並べ替え問題、日本文だけから英文を作る問題、文章とイラストから内容を把握して質問に答える問題からなっていて、レベルは高校一年（Basicレベル）程度である。以下の文中ではこれをテスト1とする。もう一つは英語の音声流して質問に対する答えを選ぶという、TOEICのリスニングテストを模した形式のものである。難易度はTOEICで500点台に相当するレベルとされている。こちらは以下においてテスト2とする。どちらのテストも100点満点とした。

さらにテストに加えて、学習意欲に関わるファクターとして、学生のこれまでの英語に関する体験や英語に対する考えを知るために、記述式のアンケートに回答してもらった。これは、4月の第1回の授業の際に行った。

テストの結果

はじめに、2種類のテストの結果をグループ別に集計すると、次ページの表1のようになった。

表1 両グループのテストの結果

	A				B			
	テスト1		テスト2		テスト1		テスト2	
	1回目	2回目	1回目	2回目	1回目	2回目	1回目	2回目
平均	62.22	63.92	51.74	54.6	55.31	55.55	45.88	46.46
最高点	98	91	87	93	89	96	67	80
最低点	22	27	20	20	11	17	20	20

AとBの比較ではAのほうがやや点数はよいものの、1回目と2回目との比較では、2つのグループ共に大きな差は出ていない。平均ではどれも2回目の方がわずかに上がっているようにも見えるのだが、データにt検定を行ったのが表2である。

表2 t検定の結果

	A				B			
	テスト1		テスト2		テスト1		テスト2	
	1回目	2回目	1回目	2回目	1回目	2回目	1回目	2回目
平均	62.22222	63.92063	51.74603	54.60317	55.31667	55.55	45.88333	46.46667
分散	282.2401	276.3968	219.7409	265.0174	247.576	365.0314	149.054	188.0497
観測数	63	63	63	63	60	60	60	60
ピアソン相関	0.736921		0.245669		0.677386		0.155628	
仮説平均との差異	0		0		0		0	
自由度	62		62		59		59	
t	-1.11192		-1.18509		-0.12613		-0.26766	
P(T<=t) 片側	0.135234		0.120253		0.450029		0.394949	
t境界値 片側	1.669804		1.669804		1.671093		1.671093	
P(T<=t) 両側	0.270467		0.240506		0.900057		0.789898	
t境界値 両側	1.998972		1.998972		2.000995		2.000995	

わずかな上昇が見られたものの、t検定の結果では、統計的に有意な差は認められなかった。したがって、グループごとの平均点に注目するなら、1回目と2回目で変化はなかったと結論しなければならない。

それでは、平均の場合と同じように、それぞれの学生の点数も、1回目と2回目では大きく変移しなかったのだろうか。個人の2回目の点数から1回目の点数を引いた値を上昇値と呼ぶことにする。この値を計算してみた結果、次の表3および表4のようになった。グラフの横軸が上昇値、縦軸は人数である。

表3 Aグループの上昇値

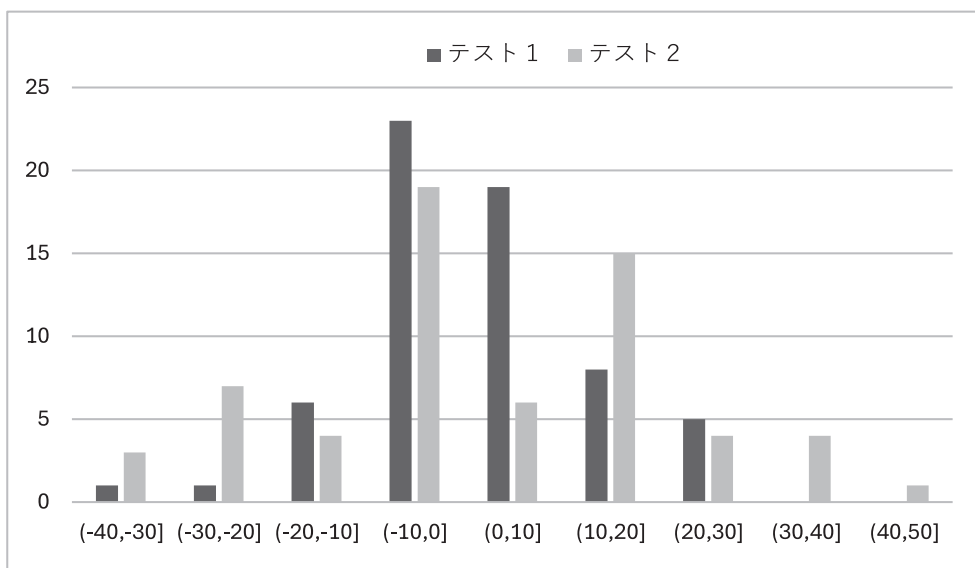
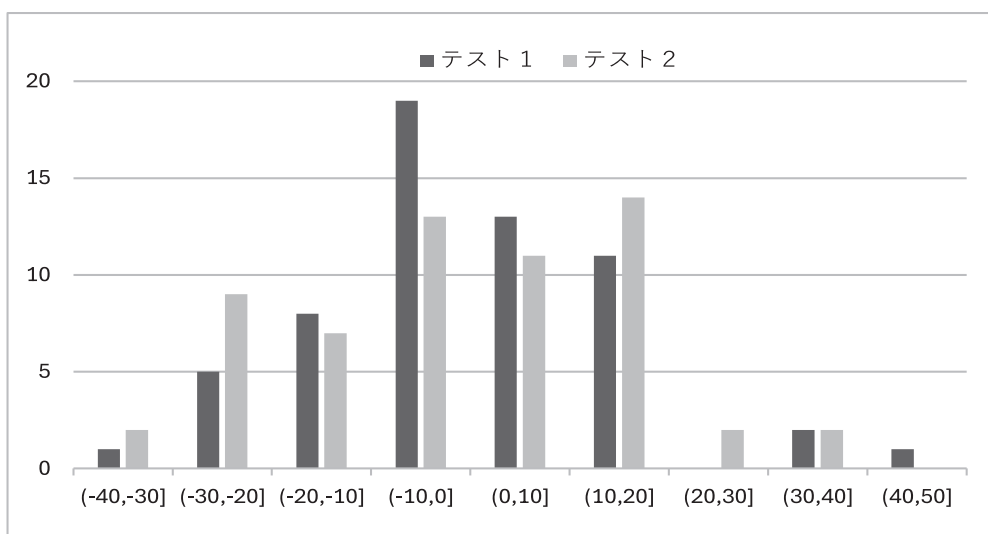


表4 Bグループの上昇値



平均値ではなく個人での変容をみると、1回目と2回目でその点数が大きく変化している学生も多い。10点以上の変化があった学生はどちらのグループ、どちらの問題でも3分の1以上に及ぶ。2回とも同じ問題なのに例えば30点以上と大きく点を下げている学生がどちらにも数名いるのも不思議な現象ではある。さらに詳しく見てみると、テスト1では30点以上上がっているのにテスト2では30点以上下がっている学生がいるなど、全く無秩序な結果といった印象である。

結論として、同一テストを2回行ってその結果を比較するという調査においては、対象学生個人の得意／不得意や学部による違い以外には、結果に差はなく、2回のテストの比較でも、全体としてはほとんど違いがないということであった。個人での比較においても、点数に若干の変化はあるものの、当初の仮説である、学部による英語学習に対する意欲や、テスト結果の差などの明確な差や違いは見られないという結果であった。

アンケートの結果

対象学生の英語に関するこれまでのいろいろな体験についてアンケートを実施した。現在の英語力はテストで測定できるが、それとは別に、学生がこれまでの英語学習をどう考え、英語に関してどのような経験をしているかを知りたいと考えてのことである。ここでは、このアンケートに対する回答について紹介する。

4月の最初の授業の際に、次の質問に対して、自由記述式で回答してもらった。

- (1) これまでの英語の学習について。得意だったとか苦手だったとか、英語の中でも苦手な分野など、なんでも書いてください。
- (2) これまでに旅行やホームステイなどで外国へ行った経験はありますか。また、今後行ってみたい国はありますか。
- (3) 英語の授業以外で外国の人と話した経験はありますか。その際のエピソードなどを教えてください。
- (4) 英語を学習することに関してどのように考えていますか。また、今後の目標などがありますか。
- (5) 英検や TOEIC など英語の資格を持っていますか。取得済みのもの、これから受けてみたいものがあれば教えてください。

(1) これまでの英語学習についての質問では、「とにかく苦手でした」という学生から、「英語が好きで英会話スクールにも通っていた」というような学生まで、さまざまであった。また、苦手とする分野も、文法、長文、リスニングなど、いろいろな回答があった。その中で、中学校のときには英語が得意だったのに、高校へ入ってから苦手になった、という学生が多かったのが気になった。授業の内容が難しくなったためとも考えられるが、レベルの高い高校に入学して相対的に順位が下がったためにそのように感じただけなのかもしれない。

(2) 海外渡航の経験については、海外旅行に行ったことがある学生、短期のホームステイ経験のある学生も中にはいたが、多くは、日本から出たことがないという回答であった。ただし、外国の行きたい場所をいろいろと挙げている学生は何人かいた。外国へ行くことへの関心は高いようであった。また、今年の大学1年生は、中学校のころに新型コロナウイルスの流行が始まったため、その

影響を直接的に受けている。パンデミックのため予定されていた海外への修学旅行が中止になってしまった学生もいた。

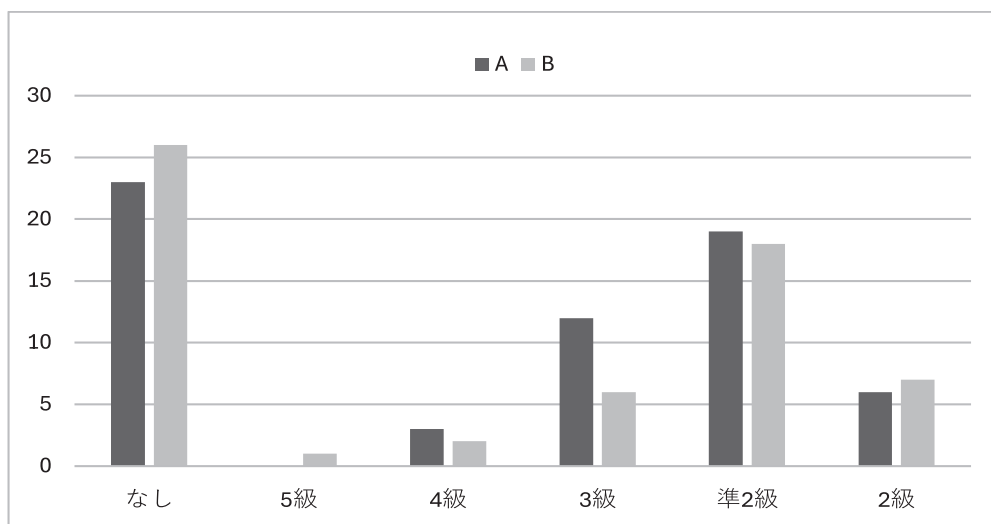
(3) 外国の人との接点についての質問では、大部分の学生が、町で道を尋ねられるなどの経験をしていた。このような学生が多いことに最初は驚いたが、コロナの流行が一段落し、外国からの観光客が激増している現在の状況を考えれば納得がいく。そのような出会いはほんのひと時の経験ではあるが、うまく対応できた学生にとっては自信となり、うまく対応できなかった学生にとっては英語学習に対するモチベーションとなった様子が読み取れ、道を尋ねられる程度のことで学生本人にとっては意外に大きな経験となりうるということが感じられた。また、オンラインゲームのような形で海外との接点を持っているというのはいかにも現代らしいと思った。

(4) 英語学習に対する意識を尋ねると、大切なスキルであると認識している学生が大部分であった。ただ、それが積極的な英語学習に結び付くかというそれは別問題のようである。もっとうまく話せるようになりたいとか、大学院進学を見越して原書を読める読解力を身に着きたい、旅行や留学に行きたいと考える意欲的な学生がいる半面、それほどでない学生もいる。英語が好きかどうか、得意かどうか、具体的な目標があるかどうかによって大きく分かれそうであった。

外国人の友人がいるが、会話はスマートフォンの翻訳機能を使っていて、それで足りているという学生もいた。確かに自動翻訳は通常の会話ならばほぼ問題ないレベルに達している。このような技術を手軽に使える現代に、英語を学ぶ必要はあるのか、少なくとも全員必修である必要はないのではないかという疑問を学生が持つのも不思議ではない。なによりこれは私たち英語を教える立場の人間にとって、真剣に考えなければならない問題である。

(5) 英語の資格についての質問では、TOEICを意識している学生がかなりの数にのぼった。大学生になったばかりのためか TOEIC を既に受験したことがある学生はほとんどいなかった。一方、

表5 グループ別 英検取得状況



英検を受験している学生は多かった。英検に合格している人数を級別にグラフにすると、表5のようになった。どの級も取得していない学生が全体の3分の1以上である。一方、3分の1以上の学生が準2級以上を持っている。近年では、英検をはじめとする外部試験の成績を大学入試における評価対象にすることがあるので、受験生も、高校によるが先生も、英検の受験に熱心であることが影響していると考えられる。それにしても、この準2級以上の割合の高さは意外であった。また、2級・準2級を取得している学生の多くが、英語に対して苦手感を持っていた。レベルが上がると自己評価の基準も高くなるということなのか、またはこの合格者たちは実力ではなく試験対策のような表面的なものだけで2級や準2級に合格したと感じているのか。今回の調査だけではそのあたりの理由まではわからなかった。

おわりに

今回の調査で、今の学生たちが、英語に関してどのように感じ、どのように取り組んでいるかの一端を知ることができた。学生たちは授業以外にもいろいろな形で英語を使う経験をしていることもわかった。また、それぞれの経験や必要性から、うまく話せるようになりたい、とか、TOEICを受験して目標とする点数を取りたいなど、英語学習に対する意欲をもっている学生が一定数いるということがわかったのは、頼もしく感じられることであった。

大学で英語の授業を経た上で、どれほど英語力の伸長がみられるか、という同一問題を使用した2回のテスト結果については、A、Bの対象群のグループで、全体としてはほとんど伸びが見られなかったのは残念であった。2回のテストの間に行っていた授業が、学生の英語力に寄与しなかったとは思わない。実際、授業に沿った内容で行った期末試験では多くの学生の健闘が見られた。ただ、今回の試みにおいて、授業では、特にテストの内容に関連した指導はしなかった。おなじ調査をもっと長い間隔で行えばどうなるかはわからないが、少なくとも半期の授業では、一般的な内容の授業によって、特定の内容のテストの結果を統計的に意味があるくらいまで伸ばすには短いと感じた。その意味で、この調査の手段として、今回行ったテストが適切であったかどうかという点に関して、筆者としては工夫したつもりではあるが、テストは学生の英語力の一部を測定するものであり、その妥当性には一抹の疑問が残る。

著者は以前の調査で、英文の音読に関して、授業中に機会をとらえて注意するといった程度の指導でもそれを続ければ一定の効果が出るということを確認している。文法力や語彙力、読解力は簡単に伸びるとは考えにくい、学生と接するのが基本的には週1コマの大学教員としては、限られた時間の中で、基本的な4技能を伸長する地道な指導をこつこつとやっていくしかないことを、今回の調査で確信した。与えられた週1コマの授業を有効に活用して、これからも学生たちを指導していきたいと思う。

参考文献

風間友理. (2023). 日常の授業における英文の音読指導について. 常磐会学園大学研究紀要第23号, 57-64

注 釈

注1) どちらのグループも、調査対象のテスト4回を受験した学生のみを対象とした。

注2) 理系のクラスには、教科書に沿った授業のほかに、彼らが必要とする専門用語の英単語の暗記と小テストが毎週課せられた。こちらの成績は大変良かったことを記しておく。